

戦後後期中等教育の外国語（英語）科教科書に見られる 「(異)文化へのまなざし」の変遷について

－文科省検定済英語教科書の「偉人伝」題材の質的分析を通して－

東川直樹

1. はじめに

現在、日本の中等教育における外国語（英語）科教育ではコミュニケーション能力の伸長とともに外国語を通じて言語および文化に対する理解を深めることが求められている。事実、現行の学習指導要領では、その基本目標として「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを確認したり自分の考えなどを実現したりする実践的コミュニケーション能力を養う¹⁾」とある。

一方、昨今、大学のみならず中学校や高等学校の現場でも「教室の多文化化²⁾」が進行し、多様な文化的背景をもった学習者の存在が日常化しつつあるという実態がある。例えば、筆者の前任校では初等教育および前期中等教育を米国で終えた「帰国生」や父親がトルコ人、母親が日本人といった「新渡日生³⁾」などの学習者が教室にいた。また、現任校でも、入試直前に母親とともに中国より渡日したいいわゆる「ダイレクト新渡日生⁴⁾」が他の生徒とともに英語科授業を受けている。

以上のような今日的な状況を踏まえて英語科教育における文化教授のあり方をどのように捉えるべきかという問題が目下、中等教育に携わる英語科担当教師にとって急務の課題となっているのである。本稿では、「偉人伝」題材を大文字C文化の一端を示すものと捉え、戦後高等学校英語教科書で取り上げられてきた「偉人伝」題材の変遷を辿ることにより、日本の後期中等教育の外国語教育における(異)文化へのまなざしがどのように変容してきたかを概観したい。その上で、今後、わが国の中等教育の外国語（英語）科教育の枠内で文化教授をどのように組み込んでいくべきかについて考えてみたい。

2. 異言語・異文化への入り口としての英語

後期中等教育において、英語は文部省の学習指導要領にも示されているように、外国語科の選択科目のひとつである。したがって、本来、英語は複数の科目（独語、仏語、中国語、韓国語など）が選択肢として与えられ、

学校現場における現実的な選択肢のひとつとして学習者に提供すべきものである。ところが、現状はまったく異なる。すなわち、日本では昭和31年までに、すべての都道府県で高校入試に英語が加えられるようになり、ほぼ中学生全員が英語を学ぶという実態が生じた。それに続ける形で、高等学校においても、学習指導要領上では選択教科であっても、事実上、ほぼ日本全国の高校生全員が英語を学んでいるという事態になった。つまり、「外国語＝英語」という特殊事情が日本の中等教育の現場に生じたのである。換言すれば、中等教育の英語科教育が学習者に対する実質的な異言語・異文化への入り口となってしまったわけである。

3. 「(異)文化」の定義をめぐって

ここで、本稿のキーワードである「(異)文化」ということばについて触れておきたい。そのためにはまず「文化」そのものの意味を吟味する必要がある。

「文化」の定義については、これまでに様々な研究者による定義が行われている。Geertz(1973)は文化を個人を超え、外在するものとして捉え、「人間は自ら紡ぎだした意味のくもの巣にとまっている動物であり、文化とはそのような意味のくもの巣である⁵⁾」と述べている。また、Kramsch(1998)は文化を「1つの談話を共有する地域社会における構成員が、共通の社会空間と歴史を有し、また物事を理解したり、信じたり、価値判断をしたり、行動したりするための基準となる共通の制度、規範、価値システム⁶⁾」と説明しているし、宮岡(2002)によれば、文化とは、「①ある言語共同体が自らの環境、すなわち言語外現実の全体をどのように認識するか－範疇化のありようとその範疇の操作と操りだし方(思考と表現)－、そしてその認識の仕方と基本的に結びついた形で、②環境にどのように生態的適応をしていくかという、共同体に固有の様式⁷⁾」となる。

以上の考え方を参考に、筆者は本稿において「文化」を「ある共同体においてその構成員によって共有される価値システム」と捉え、「その構成員によって生み出された芸術など具象物として顕現化されるもの(著作、創造物などを含む)を大文字のC文化、日常生活の儀礼、

規範、習慣などハビトゥスに関わるものを小文字のc文化」と考えることとする。

4. 異文化へのまなざしの変遷を概観するためになぜ英語教科書の「人物伝」題材を取り上げるのか？

前述したように、文化の捉え方のひとつとして、C文化とc文化という捉え方がある。そのうち、戦後を通じて、どの時代においても必ず取り上げられてきた題材の一つは「偉人伝」であり、C文化のカテゴリーに属するものと筆者は考える。従って、「人物伝」題材を通時的に観ることにより、戦後の英語教育の枠内における異文化観、つまり、「異文化へのまなざし」の変遷ぶりが多少なりとも浮き彫りになってくるものと考えたわけである。では具体的に、高等学校の英語教科書ではどのような人たちが「偉人」として、これまでに取り上げられてきたのであろうか？本稿では、戦後の検定教科書に登場する「偉人たち」に焦点を絞り、特徴的な点を拾い出してみることにした。

ところで、「偉人」とはどのような人たちを指すのであろうか？教科書という性格上、ある意味、教科書に登場する人物はすべて「偉人」とも言える訳だが、ここで「偉人」の意味について簡単に確認しておきたい。『広辞苑（第五版）』によれば、「偉人」とは「偉大な人。すぐれた人。大人物。⁸⁾」となる。また、『新明解国語辞典（第5版）』では「立派な仕事をした、尊敬すべき人⁹⁾」とある。つまり、偉人とは何らかの行為を通して、人類・社会に貢献する人たちということになる。

実際に教科書の題材分析を進めていくと、いわゆる「有名人」が数多く登場する。その際、果たしてこの人物が「偉人」というカテゴリーに組み入れることができるのか判断に迷ってしまう。

5. 教科書分析の目的と方法

本研究で各時代の異文化観の表象の一部として、戦後の英語教科書で取り扱われる「偉人伝」題材を位置づけ、質的分析を行なうことにした。その目的は、外国語（英語）教育における文化教授のあり方を考察するための視座を得ることにある。さらにより多文化化する学習者にどのような（異）文化理解題材を提示すべきかという課題を解決するためのヒントを得ることにある。今回はそのために、学習指導要領の変遷に沿わせて、時代区分を設定することにした。言うまでもなく、学習指導要領に則って、教科書教材は各教科書会社によって作られるからである。実際の分析に際しては、戦後の高校英語教科書について、「偉人伝」題材を拾い上げ、通時的に、それぞれの特徴を見ていくという作業を行った。

ここで各高等学校学習指導要領の特徴について簡単に触れておくことにする¹⁰⁾。

(1) 昭和22年版（中・高）～

終戦後、しばらく行われていた学習指導要領であるが、この時期の学習指導要領は手引きという位置づけであり、各学校の裁量権が大きかったと言われている。昭和28年までは学習指導要領（試案）という名称であった。高等学校の学習指導要領は昭和23年から実施されているが、昭和24年に改訂された。

(2) 昭和26年版（中・高）～

この時期、自由研究は廃止され、教科以外の活動（小学校）、特別教育活動（中学校）と改められている。体育科は保健体育科に、職業科は職業、家庭科に改められた。

(3) 昭和30年版（高）～

外国語が第一外国語、第二外国語と呼ばれた時代。高等学校の学習指導要領のみが改訂され、昭和31年度の第1学年から学年進行で実施された。

(4) 昭和35年版（高）～

系統性を重視したカリキュラムを特徴とする。公立学校に対して強制力がある。高等学校の学習指導要領は昭和35年に告示され、昭和38年度の第1学年から学年進行で実施された。高等学校の古典、世界史、地理、数学II、物理、化学、英語にA、B（または甲・乙）の2科目を設け、生徒の能力・適性・進路等に応じていずれかを履修させるようにするなど、科目数が大幅に増加した。高等学校の外国語が必修となったほか、科目の履修に関する規定が増加した。

(5) 昭和45年版（高）～

現代化カリキュラムといわれる濃密な学習指導要領である。高等学校の学習指導要領は昭和45年に告示され、昭和48年度の第1学年から学年進行で実施された。高等学校の社会科や理科で旧課程のA・Bの区分は止め、新たに地理A（系統地理的）、地理B（地誌的）などを設置した。そして、昭和51年に学習内容を削減する提言が中央教育審議会でなされた。

(6) 昭和53年版（高）～

ゆとりカリキュラムといわれる、教科の学習内容が少し削減された学習指導要領である。現代化カリキュラムは過密であり、現場の準備不足や教師の力不足もあって、大量の付いて行けない生徒を生んでしまった。これに対する反省から授業内容を削減したものになっ

ている。私立学校はあまり削減を行なわなかったもので、公立学校との差が付き始めた。学校群制度なども影響し、公立学校の進学実績の低下が明らかになった時期でもある。小中学校の学習指導要領は昭和52年に告示され、小学校は昭和55年度から、中学校は昭和56年度から実施された。高等学校の学習指導要領は昭和53年に告示され、昭和57年度の第1学年から学年進行で実施された。

(7) 平成元年版(中・高)～

新学力観が登場した。個性を生かす教育を目指して改定された、教科の学習内容をさらに削減した学習指導要領となっている。学習指導要領は平成元年に告示され、小学校は平成4年度、中学校は平成5年度から実施された。高等学校は平成6年度の第1学年から学年進行で実施された。高等学校では社会科を地理歴史科と公民科に再編するとともに、家庭科を男女必修とした。

(8) 平成11年版(高)～現在

生きる力の育成が叫ばれる。戦後7度目の改訂といわれる、現行の学習指導要領である。学習指導要領は平成10年に告示され、小中学校は平成14年度から実施された。高等学校は平成15年度の第1学年から学年進行で実施された。生きる力の育成とゆとりある教育をねらいとし、自ら学び自ら考える力の育成、教育内容の厳選と基礎・基本の確実な定着、特色ある教育・学校づくりを目指して改訂された。学校完全週5日制が実施された。中学校では英語が必修となった(実質的には大部分の学校で以前も必修扱いであった)。また、小学校中学年から高等学校において総合的な学習の時間が、高等学校において情報科が創設された。その一方で、教科の学習内容が大幅に削減され、さらに中学校・高等学校においてはクラブ活動(部活動)に関する規定が削除された。学力低下の非難に対応すべく、文部科学省は、学習指導要領は最低水準との見方を示した。

6. 各時代区分別に見られる「偉人」題材の特徴

では、実際に戦後の英語教科書がどのような「偉人」を取り上げてきたのか、通時的に概観してみたい。誌面の都合上、高等学校学習指導要領の変遷に応じた時代区分を以下の4つに分け、各々の特徴について詳述する。

(1) 学習指導要領(中・高)～昭和30年版学習指導要領(高)

戦後まもなく告示された学習指導要領に沿って作成された高等学校英語教科書に登場する「偉人」には、科学者や発明家が多い(L. Pasteur, M. Curie, B. Franklin,

Galileo, Mendel, Faraday, Darwin, Edison, Bellなど)。ちなみに*Advanced Tsuda Readers*には野口英雄が登場している。

以下に示すのは、“Louis Pasteur”(河村重治郎編修、*The New Vista English Readers Senior I*、三省堂)の第1段落である。

By now, we all know that some microbes are among the deadliest enemies of mankind. Because of them, numberless lives have been lost since man first came to the world, and because they are too small to be seen by the naked eye, they passed unnoticed, centuries upon centuries, doing great mischief.

ちなみに教室で生徒に、Pasteurの認知度を確かめてみると、ほとんどの学習者が「そんな人は知らない」という返答を行なった。

Helen Kellerは昭和24年発行の*High School English*に登場して以来、現在まで久しく支持され続けている「偉人」である。サリバン先生との出会い、さまざまな障害を乗り越えていく姿に感動を覚えぬ人はいないであろう。

芸術家としては、画家のLeonardo da Vinciが*Advanced Tsuda Readers, Book Three*(粕谷よし編修、三省堂)などに登場している。音楽ではMozart, Beethoven, Schubert, Brahms, Dvorakといった作曲家が*Light and Delight 3*(渡辺精著、大修館)で取り上げられている。

スポーツ選手としてはBabe Ruthが*High School English*(開隆堂)に登場しているし、哲学者Socratesも複数の教科書で取り上げられている。

(2) 昭和35年版学習指導要領(高)～昭和45年版学習指導要領(高)

それまでは音楽家の「偉人」といえば総じてクラシック音楽の作曲家であったが、昭和35年版学習指導要領の公示を受けて、アメリカ伝統音楽の先駆者、Stephen Fosterが複数の教科書(*Highroad to English Reading Course 1*三省堂, *Diamond English Readers 1*増進堂)に登場する。Stephen Fosterは“O! Susanna”や“Beautiful Dreamer”などアメリカ南部を題材にした有名な曲を数多く作っている音楽家である。

米国赤十字の創設に寄与したClara Barton(*Diamond English Readers 1*増進堂)や非暴力を訴えたMahatma Gandhi(*The Crown English Readers - Third Edition-Book Two*,三省堂)が「偉人」として取り上げられている。これは昭和45年度版に「国際理解」が目標に入ったことが反映したものと考えられる。

(3) 昭和53年版学習指導要領(高)～平成元年版学

習指導要領（中・高）

この時期になると Charles Chaplin が盛んに教科書に登場するようになる。幼少の頃より、厳しい境涯に置かれ、たいへんな苦勞の末、喜劇王となっていく様が多くの生徒たちの心を惹きつけたのだらう。時代背景としては、東京オリンピック開催があり、東海道新幹線の開通など日本国中が建設ラッシュでわいていた頃である。

Martin Luther King, Jr. もこの頃より多くの教科書で取り上げられるようになった。キング牧師は米国のアフリカ系アメリカ人公民権運動の指導者で、1964年ノーベル平和賞を受賞している。それに加えて、“I Have A Dream” など彼の演説が突出した名スピーチであることも恰好の英語題材となっている所以である。1955年、公営バスの運転手の命令に背いて白人に席を譲るのを拒否し、逮捕された Rosa Parks のモンゴメリー・バス・ボイコット事件も、もっとも印象に残る「偉人」題材のひとつとして現在にまで受け継がれている。

ほかにも、貧しい人たちの救済活動に生涯をささげた Mother Teresa (安藤昭一, David Hale 他著, 1986. *MAINSTREAM II*. 増進堂) や生まれつき右手がないというハンディキャップを抱えながらメジャーリーグに登りつめた左腕投手 Jim Abbot (金田道和他著, 1993. *MILESTONE English Course I*, 啓林館) など、生徒たちの心に響く秀逸な「偉人」伝が題材として登場した。

(4) 平成 11 年版 (高) ~ 現在

近年、さまざまな分野の「偉人」たちが英語教科書に登場するようになった。例えば、平成 19 年度使用予定の「英語 I」の教科書 (16 出版社 37 種) の場合、「偉人」を扱った本課本文は 100 課以上に及んでいる。「偉人」たちは科学者、芸術家、スポーツ選手、冒険家、社会運動家やボランティア活動家、写真家、漫画家、歌手など多岐に及んでいる。例えば、某教科書で松井秀喜さんがメジャーリーグで活躍する様子が取り上げられているが、日本人が世界の舞台で活躍するというストーリーの典型例であるといえる。近年、英語教科書に、いわゆる「有名人」がより多く登場する傾向にある。しかし、実際に「偉人伝」題材の分析を進めていくと、果たしてその人物が「偉人」というカテゴリーに組み入れることができるのか判断に難しい場合も多々ある。「偉人」と単なる「有名人」とは質的に異なる部分があるはずだが、教科書編集者・著者の「偉人」の捉え方、つまり、C 文化についての (異) 文化観が揺らいでいるのかも知れない。

7. おわりに

冒頭でも述べたが、近年、高等学校の現場でも学習

者の多文化化が日常的なレベルで感得されるようになってきている。そのような状況下で、中等教育の外国語 (英語) 教科書教材でどのような「偉人」をどのような形で学習者に提示するべきかについて再考する必要があると筆者は考える。なぜなら「偉人」題材はある意味でその社会における規範を示すものであり、その時代、その社会の (異) 文化理解観を反映する鏡のひとつと考えられるからである。教育現場を取り巻く状況はどんどん変化していく。教室には中国籍の生徒やフィリピン人の母親をもつ生徒たちがいる。教育研究者のみならず教育実践者=教師一人ひとりが眼前の生徒とどのように向き合うべきか日々問われていることを痛感する。

【注】

- 1) 現行版学習指導要領第 2 章第 8 節外国語第 1 款目標 (波線は筆者による)
- 2) 東川直樹「教室の多様化に対応する外国語教育のあり方をめぐって」『言語文化教育の可能性を求めて』(三省堂、2002) 99 頁～104 頁。
- 3) いわゆる「ニューカマー」、つまり、近年になって様々な理由・経緯のもとに、諸外国から日本にやってくるようになった、外国人およびその子弟のことである。志水宏吉・清水陸美編著『ニューカマーと教育』(明石書店、2001) 11 頁。
- 4) 日本の小学校・中学校を経ずに、外国の中学校修了後、直接、日本の高等学校に入学してくる生徒のことである。
- 5) Geertz, C. *The Interpretation of Cultures* (Basic Books 1973) 5 頁。
- 6) Kramsch, C. *Language and Culture* (OUP, 1998)
- 7) 宮岡伯人・崎山理編『消滅の危機に瀕した世界の言語—ことばと文化の多様性を守るために—』(明石書店、2002)
- 8) 新村出編『広辞苑 (第五版)』(岩波書店、1998) 141 頁。
- 9) 金田一京助『新明解国語辞典 (第五版)』(三省堂、1997) 66 頁。
- 10) ja.wikipedia.org/wiki/ 学習指導要領。

【参考文献】

- 青木順子『異文化コミュニケーション教育』(溪水社、1999)
- Block, D. & Cameron, D. *Globalization and Language Teaching* (Routledge 2002)
- 遠藤克弥『国際化理解と教育』(川島書店、1998)
- Fantini, A. E. *New Ways in Teaching Culture* (TESOL 1997)
- Geertz, C. *The Interpretation of Cultures* (Basic Books 1973)
- 寛文生・飛田就一編著『国際化と異文化理解』(法律文化社、1990)

- 小池生夫「異文化理解を視点に入れた外国語教育」、『異文化
間教育8』（アカデミア出版会、1994）
- Kramersch, C. *Language and Culture* (OUP、1998)
- 口羽益生「異文化理解の理論と方法」、山口修・齋藤和枝編『比
較文化論』（世界思想社、1995）
- 細川英雄『日本語教育は何をめざすか－言語文化活動の理論
と実践－』（明石書店、2002）
- 宮岡伯人・崎山理編 『消滅の危機に瀕した世界の言語－こ
とばと文化の多様性を守るために－』（明石書店、2002）
- 森住衛『単語の文化的意味』（三省堂、2004）
- 大喜多喜夫『英語教員のための応用言語学』（昭和堂、
2000）
- 佐野正之・水落一朗・鈴木龍一「異文化理解のストラテジー」
（大修館書店、1995）
- 佐藤郡衛『国際理解教育』（明石書店、2001）
- 志水宏吉・清水睦美編著『ニューカマーと教育』（明石書店、
2001）
- 東川直樹「教室の多様化に対応する外国語教育のあり方を
めぐって」『言語文化教育学の可能性を求めて』（三省堂、
2002）
- 『英語科授業学の今日的課題』（金星堂、1997）
- 當作靖彦「外国語教育における文化の役割」『言語教育の新
展開 牧野成一教授古希記念論集』（ひつじ書房、2005）
- 山田泉「多文化・多言語主義と子どもの発達」『外国人の定
住と日本語教育』ひつじ書房、2004）
- 山内進編著『言語教育学入門』（大修館書店、2003）
- 横田勉『英語科教育学－新しい教育英語学への方向－』（リー
ベル出版、1993）
- Wikipedia.org/wiki/ 学習指導要領 (25/08/06)

(とがわ なおき・大阪市立中央高等学校教諭)